2-P-11

2 年目幼稚園教諭の教師力の成長　―反省記録を基に―

多田琴子
後藤晶子　上月素子　光成研一郎

本研究は、一人の保育者を追いかけ、教師力の成長や成長につながる課題を見いだす継続研究である。2 年次は、幼稚園教諭の反省記録を基に、研究を進めた。1 年次におこなった保育者の発語からの考察で、教師力の核となる保育観（子どもの行為をどのように見ていくかの幼児観、活動に対する考え方の教材観、保育者の願いや保育の意図の指導観）についての読み取りが難しいという課題が見いだせた。

2 年目の研究方法は次の通りである。期間：平成 26 年 4 月から 27 年 3 月である。研究の基礎資料：保育者の反省記録と参与観察者のつぶやき記録である。

保育者の反省記録の記述を「子どもについて」「活動について」「指導について」に分類し、保育観を構成する観点を見いだした。さらに、保育観を構成する観点と記録日のマトリックスに生起した数をプロットし、可視化した。考察は、マトリックス表からの読み取りと参与観察者のつぶやきからおこなった。

結果として見えてきた 2 年目幼稚園教諭の課題は、①幼児理解に基づく先の見通しを持つこと、②保育者自身が自分の教師力を自覚すること、③管理職から指導されたことを否定的評価として受け止めるためうまく活かせないこと　である。教師力の成長に効果的なかかわりを参与観察者としておこなうことは、引き続きの課題である。

2-P-12

成人女性に対するヨガの肩こり感改善および健康関連 QOL 向上効果

藤原　桜
尾﨑雅子

【背景】平成 22 年国民生活基礎調査によれば､肩こりは女性が訴える症状の第 1 位である。また、肩こりが長く続くと健康関連 QOL（Health Quality of Life；HRQOL）が低下することが報告されている。ヨガは姿勢、呼吸法、瞑想による精神の統一を含む健康法で、様々な効果が明らかにされている。しかし、肩こりに対する効果は未だ明らかにされていない。

【目的と方法】肩こりを体験している成人女性に対するヨガの効果を明らかにすることを目的とした。方法は、成人女性 23 名に週 1 回 30 分間のヨガを 4 週間（計 4 回）行ってもらい、ヨガ前後の肩こり感、リラックス感、唾液アミラーゼ、左右僧帽筋硬度を比較した。また、ヨガ実施 1 回目前とヨガ実施 4 回目後の HRQOL を Health Surveys；SF-8 で比較した。測定値の比較には Wilcoxon の符号付順位検定を用い、有意水準は 5%とした。

【結果と考察】対象者 23 名のうち途中辞退をした 3 名を除外し、20 名を分析対象とした。平均年齢は 51±16 歳であった。唾液アミラーゼはヨガ実施 4 回中 1 回のみ有意差を認めたが、他の 3 回は有意差がなかった。しかし、肩こり感、リラックス感、左右僧帽筋硬度はヨガ実施 4 回全てにおいて有意差を認めた。また、SF-8 は、身体的サマリースコアに有意差を認めたが、精神的サマリースコアは有意差がなかった。以上の結果から週 1 回 30 分間のヨガ 4 週間実施は、肩こり感の改善と HRQOL(身体的健康感)を高めることが示唆された。

2-P-13

「高齢者健康体操」に参加している地域在住高齢者の現状と継続参加を可能にする要因の検討

谷口由佳
近藤裕子　有田弥棋子　長尾厚子　大串美沙

本研究は、「高齢者健康体操」(以下、健康体操)に参加している地域在住高齢者の現状を把握し、その継続参加を可能にする要因を検討することを目的とした。健康体操に 1 年以上継続参加している高齢者 53 名(全員女性、年齢 77.4±5.1 歳、継続年数 6.9±4.2 年)を対象とし、身体的機能(握力、上体おこし、長座体前屈、開眼片足立ち、椅子すわり、5m 最大歩行速度)及び精神・心理的機能(MMSE、GDS15)、社会的機能(LSNS-6)、身体活動量(1 週間の歩数)、生活機能(老研式活動能力指標)、QOL(改訂版 PGC モラール尺度)を測定し、その結果を継続年数別(1 年以上 5 年未満、5 年以上 10 年未満、10 年以上)に比較検討した。さらに、参加の動機や感じている効果等について、フォーカスグループへの半構造化面接を実施し、健康体操への継続参加を可能にする要因を質的に分析した。その結果、身体及び精神・心理的機能については継続年数による差異は殆どみられなかったが、社会的機能については継続年数が長い高齢者ほど、LSNS-6 が高値を示していた。高齢者にとって、健康体操への参加は社会的ネットワークを構築する機会となっており、同年代の気の合う者同士の交流といった楽しみが継続参加を可能にしていると考えられた。また、高齢者は健康体操に対し、身体的機能の向上というよりは、むしろ維持を期待しており、年齢や体力に合った内容であることが、継続参加を可能にする鍵となっていることも分かった。

2-P-14

英語絵本を導入した初等英語教育教員養成プログラム開発に関する研究

脇本聡美

本研究は、キーラン・イーガンの提唱する感情や想像力に働きかける教育方法論(Imaginative Approach, 以下IA)に基づいて、初等英語教員養成のプログラムを開発することを目指している。教員を志望する学生が、「話しことば」として学ぶ英語学習の方法と概念についての理解を深めることを目指すプログラムの開発は、今後の教員養成課程、および、小学校での英語教育を充実させていくために有効であると思われる。

イーガンの理論をもとに、初等教育教員養成課程の英語授業において、英語絵本を使い、学生が児童に対する英語教育（Teaching English to young learners、以下TEYL）について理解を深め、認知的道具を活用することを目指す授業をデザインする。デザインした授業の有効性を検討するために、学生たちの授業中のディスカッションの会話、活動後の学生のリフレクションをデータとし、その質的分析を通し、学生がTEYLにおけるIAとその概念を理解したかを明らかにすることを目指した。

分析結果から、学生のグループによって認知的道具の使用の多様性が様々であることが明らかになった。ディスカッションの中で言及された認知的道具の多様性は、模擬授業として、彼らが創作した絵本を使った活動にも反映されていた。一方、イーガンの提唱する「想像力」の理解については、日常的な理解の域を出ておらず、今後の授業改善が必要であることが示された。

2-P-15

統合カリキュラムにおける保健師基礎教育の課題から考える選択制教育のあり方

中田涼子
井上清美　奥野久美子

【はじめに】看護学科では平成 24 年度から新カリキュラムとなり保健師養成教育は選択制となった。看護師と保健師の国家試験合格を目指す保健師課程選択者にとってより効果的な教育内容を検討するため、統合カリキュラムにおける基礎教育の課題を明らかにする。【目的】統合カリキュラムで学修した卒業生が新任期に実感する保健師基礎教育における課題を明確にする。【方法】保健師として勤務する卒業生 5 名を対象に、フォーカスグループインタビューを行った。本学研究倫理委員会承認後研究を開始した。【結果】抽出された項目は、学修して役立った内容 :「基礎知識」「演習と実習での家庭訪問におけるアセスメント・計画立案・展開」「健康教育の実践」「看護研究演習」等。不足していたあるいは強化して欲しい内容 :「特定保健指導の計画立案・指導」「パソコン操作の基礎から応用」「乳幼児の発達におけるスクリーニング」「複合的な課題をもつ事例対応」「優先順位の判断根拠」「コミュニケーション技術」等。勤務する中で困っていること :「根拠となる資料作り」「具体的な保健指導」【考察】基礎教育での課題として、基本を中心に対象に応じて柔軟に適用できる考え方や方法について、ロールプレイや事例を通して考えを深める演習の重要性が示唆された。特に、コミュニケーション技術については、面接や保健指導内容と合わせて強化すべき内容であり、具体的な体験学習が重要と考える。

2-P-16

全学 FD を実現する「動的カリキュラムマップ」の構築

高松邦彦
村上勝彦　上田國寛

近年、中央教育審議会の答申により、高等教育では履修系統樹、すなわちカリキュラムマップの作成が求められている。本学もこれに従い、Faculty Development （FD）活動でカリキュラムマップを作成してきた。

一度作成したカリキュラムマップに対して PDCA サイクルを用いて更新し続けることが重要である。しかし、カリキュラムマップの更新作業には、教員への負担が大きいため、更新を続けることが難しく、全国の大学の課題としてあげられている。

本研究グループは、これまでネットワークの可視化に関する研究を行ってきた。本研究では、これまで開発してきたプラットフォームをカリキュラムマップに応用する。既存のカリキュラムマップを、「静的なカリキュラムマップ」として新たに定義する。これに対し、以下に述べる方法で授業間をネットワークとして可視化させ、これを「動的なカリキュラムマップ」として新たに定義した。各シラバスをベクトル空間モデルとして形式化し、空間内の各元（授業）に対して任意の 2 つに対するコサイン類似度を、それらの授業間の類似度とした。これにより、更新が継続的になる動的なカリキュラムマップを構築した。